「ボトム」に生きたアメリカ黒人の死生観

—トニ・モリスン作『スーラ』—

A Study on the "Bottom" in *Sula* by Toni Morrison

西　山　惠　美

概要

トニ・モリスンの二作目の小説，『スーラ』(1973) 論である。まず，小説の舞台である黒人近隣社会「ボトム」の重要性に着目し，その黒人の生活の場所としての特徴を示した。次いで，この場所に黒人女性として生まれた社会的な制約を自覚しつつ，母たちとは異なる生き方を意志的に追求したスーラとネルについて，それぞれの自己形成の過程と行方を分析，検討し，二人の友情の継続も，個性的な生の実現も，白人の経済的文化的な支配の故に十全ではなったことを明らかにした。さらに「ボトム」の人々のものの見方や考え方を作品の記述から抽出し，ここに白人文化に対応しこれを凌駕する新しい可能性が存在することを指摘した。

キーワード

黒人近隣社会
異端の受容
生と死の連鎖
危険なほど自由な生
トニ・モリスン
人種差別
コミュニティと個人
親密圏

目次

1　はじめに
2　第一作『青い目が欲しい』との対比

3　黒人近隣社会ボトム
4　ボトムの黒人の生――スーラとネルの場合
5　ボトムに描かれた黒人の死生観
6　おわりに

1　はじめに

トニ・モリスンの2作目の小説『スーラ』[1]は，愛，友情，善悪，暴力，人種差別，戦争，自己探求，個人の自己形成にとっての家族とコミュニティの役割など，様々なテーマを含んでおり，1972年に公刊されて以来，様々な角度から論じられてきた。[2]

これまでに筆者は，モリスンの最初の小説，『青い眼が欲しい』[3]を取りあげ，この作品における「物語ることの意味」を検討し，そこに描かれた家族とコミュニティについて検討した。[4]小説の舞台である1940年はじめのオハイオ州ロレーン市の片隅にある黒人コミュニティは，アメリカの中でも周縁的で，主人公の黒人少女たちは，小説の冒頭に描かれた白人中産階級の「アメリカン・ファミリー」の理想の絵姿とは対照的な貧困と家族崩壊の危機に直面していながら，しかもこの理想に深くとらえられて生きなければならなかった。彼女たちは，過去の記憶を語り継ぎ，現実の悲しみの体験を物語ることによって生きのびる力を獲得しようとしたことを作品内的に分析し，モリスンが白人中産階級的な価値観に代わる新しい人間社会関係を提示していることを論じた。

次いでモリスンの五作目の小説，『ビラヴィド』[5]に関する二つの小論[6]では，前作につづく「物語ることの意味」を取りあげ，物語が成立するための条件，そして人間にとっての物語の意味を明らかにすることを試みた。二つ目の小論においては，『ビラヴィド』において南北戦争を挟んだ時代のオハイオ州シンシナティに生きる黒人女性セサとその娘デンヴァーがどのようなプロセスを経て自律した生き方を発見したのかを作品の記述を分析することによって明らかにしようとした。自律のためには主人公が自らの過度な強さと依存を克服せねばならなかったが，同時に黒人コミュニティと黒人家族の変容，その両者と個人との関係の変容が不可欠であった。またモリスンが提示する黒人の自律へのプロセスと条件，自律を可能にする力を内在させている黒人文化について考察した。

本稿では，モリスンの全体像を捉えるための一歩としてモリスンの二作目の小説『スーラ』を取りあげる。『スーラ』に描かれた黒人近隣社会ボトムに焦点を合わせ，ボトムとはどのような空間であったのかを明らかにしたい。すなわち，第一にこの小説が設定された時代を念頭に置きながらボトムの特徴を明らかにし，第二にそこに描かれた人物像，特にネルとスーラの自己実現の行方について検討し，その上で第三にモリスンが提示しようとしたアメリカの白人社会が持つ価値観と対抗的で，未来を展望できるような黒人の思考方法や価値観はどのようなものであったのかを作品の叙述に即して検証し，

その意味を考えたい。

2　『青い眼が欲しい』との対比

まず，3 年前に出版された第一作『青い眼が欲しい』（以後第一作と呼ぶ）と対比してこの作品を見てみよう。第一作は，モリスン自身が 17 才まで過ごした故郷オハイオ州ロレーン市を舞台にしており，後の作品とは異なり自伝的な要素を持つ作品と考えられる。『スーラ』の舞台も同じオハイオ州であるが，架空の黒人近隣社会「ボトム」での物語が展開される。前作よりも長い期間，1919 年から 1965 年までの 46 年間が扱われている。主人公たちの年齢も前作では 9 才から 10 才の少女たちの 1940 年から 1941 年までの 1 年間であったのに対して，『スーラ』では，スーラとその友人ネルの 12 才から中年に至るまでが扱われている。

第一作でのブリードラヴ姉妹とピコーラとの友情は，同じ貧しさを運命づけられた子ども同士の共感から出発した幼さの残るものであり，姉妹はピコーラをその苦境から救い出すことはできず，ピコーラが狂気に陥ったために友情は途絶えた。一方『スーラ』では，スーラとネルの友情は長い中断があるものの，作品全体を覆っており，思春期から出発し，互いの家庭環境や感性の違いを意識した自覚的なものであった。主人公スーラは，小説のはじめには登場しないし，中途で彼女はボトムを離れ 10 年間不在となり，この間の彼女の軌跡についてはほとんど語られない。むしろこの小説では，舞台となった「ボトム」という近隣黒人社会に重点が置かれ，スーラはそこでの黒人群像の一人として描かれているとも考えられる。

また，黒人社会とその住人との関係のあり方においても，第一作では，アメリカ社会の中の黒人コミュニティは，「種を蒔いても芽吹くことがない土壌」[7]であった。一方「ボトム」は，もはや存在しない場所であることが小説の冒頭から「今では郊外と呼ばれているが，黒人たちが住んでいた頃はボトムと呼ばれていた」（3）と過去形で記され，小説の最後の 1965 年には，「やがてボトムは崩壊してしまった」（165）とあるように，その場所はすでにほとんど消滅してしまった過去のものとして描かれている。しかし，ボトムは黒人の生活の場所（place）として，多様な人間が個性豊かに描かれており，肯定的に描かれてもいる。こうしたボトムに対する評価は，1965 年の章で，55 才になったネルの視点から過去への郷愁を込めて以下のように語られている。

> 黒人たちは，新しい表情をしていたが，谷に住むか，町を去ることにひどく熱心であり，その丘を捨てて，関心を持つ誰にでも譲り渡してしまおうとしているように見受けられた。それは悲しいことだった。なぜならばボトムは本当の場所だったから。・・・おそらくそこはコミュニティではなかったかも知れないが，一つの場所に

は違いなかった。(166)

さらに人物描写を見ると，後述するように『スーラ』においては黒人像—シャドラック，エヴァ，ネル，スーラ，エイジャックス，エレーヌなど—が第一作に比べて実在感をもって造形されている。スーラの祖母のエヴァは第一作には見られないタイプの黒人女性で，ボトムの中でその存在感は大きい。また，第一作に登場した人物をさらに深化させた人物像も描かれている。例えば前作のピコーラの父チョリーに対してエイジャックスとスーラを，ジェラルディンやピコーラの母親のポーリーンに対してネルを挙げることができる。

3　黒人近隣社会「ボトム」

次に「ボトム」の特徴について考えてみよう。

3.1　メダリオンの「ボトム」

「ボトム」はどのような場所であったのか，そこでの住人はどのように生きたのであろうか。モリスンの作品において特定の場所とそこで営まれる人々の生とは緊密な関係を持ち，その意識は前作にも増して強いものがある。[8]「ボトム」はこの小説の途中で消え去った黒人近隣社会であるが，そこでの自然の風景，人々の個性的な生の営みがみずみずしく描かれている。

「ボトム」は黒人が居住する地区だが，タウンでもなくコミュニティでもなく，近隣社会（a neighborhood）と表現されている。[9]ボトムは白人のジョークによって黒人に与えられた土地であったことが冒頭に記されている。ボトムの起源は，善良な白人が約束の仕事を終えたら奴隷から自由の身にしてボトムの土地をやろうと約束し，その約束が果たされて，冬には風が吹きすさび，土地は雨に流されて耕作が難しい丘の上にあるボトムが黒人に与えられたことに発している。こうしてメダリオンは，白人が肥沃な谷間に住み，黒人が吹きさらしのボトムと名付けられた丘の上に住むという奇妙な町になった。これは，黒人が生活し耕作する場所が黒人自らの選択によらず，黒人のジョーク，つまり気まぐれや温情によって与えられたことを表しており，このことが彼らの生の営みに大きな影を落としていることを暗示する。ここには二重の逆転が見られる。つまり白人が谷に住み，黒人が丘に住む。その丘がボトムと名付けられる。しかもこの逆転を決めたのも，これを変更するのも全て白人なのである。

1965年になると，ボトムに市のゴルフコースが建設されることになり，雑草は抜かれ，谷間にある町，タウンにつづく一本道に沿って植えられたブナ，樫，栗の木々もなく，かって黒人たちが住んでいた古い建物も取り壊されている。ボトムに住む黒人は今では

谷間の町に移住するか，他の場所に引っ越してわずかしか住まなくなり，土地が高値になったため白人たちが土地を購入して移り住んでおり，「郊外」と呼ばれるようになっている。ここには産業の発展に伴う都市の変遷の姿が描き出されていると同時に，ジョークによって黒人に与えられたボトムは，都市開発の名のもとに容易に白人の手に買い戻されたことに見られるように，白人の気まぐれによってその存在を左右される黒人の運命そのものを物語っている。これこそ，小説はこの歴史的事実には全く触れていないが，アメリカ人としての市民権を獲得した 1965 年の黒人の現実であった。社会の発展は，黒人近隣社会の暮らしに見られた「脈絡のない臭いや音，嘆きやうめき声」と言ったものの一切を跡形もなく一掃してしまうのでもある。

ボトムの年代について見ておこう。『スーラ』には，前述のように 1919 年から 1965 年までの 46 年間が描かれる。この小説は，1919 年から 1927 年，1937 年から 1965 年までの二部構成であるが，年代的にいえば 3 つに分けられる。その第一は，シャドラックの「全国自殺記念日」が発足した 1919 年からネルとジュードとの結婚とスーラの出奔の 1927 年まで，第二は，スーラが突然帰郷した 1937 年からスーラの死の翌年に起こったトンネルの落盤事故によってボトムの住人が大量に死亡した 1941 年まで，第三は，その 24 年後にネルがエヴァを老人ホームに見舞い，スーラの死を回想し，その不在を嘆き，ボトムが完全に崩壊する 1965 年までである。

アメリカ合衆国の歴史からいえばこの期間は，第一部が第一次世界大戦の終結から大恐慌の勃発の 2 年前まで，第二部は大恐慌の痛手が残っている時期から，第二次世界大戦・冷戦時代の幕開けを経て，公民権運動の開始から黒人が市民としての権利を獲得する年までとなっている。多くの黒人は市民権を与えられないままに，両大戦の兵士として前線に送られた。そして 1954 年以降公民権運動が開始され，長い戦いの後 1965 年に公民権法が発効し，黒人は市民としての権利を獲得する。ただし，公民権運動についてこの作品には一切言及がない。しかし，こうしたアメリカ史の節目やこの時期が黒人に与えた影響について，モリスンが無関心であったはずはない。それはこの小説の章の見出しがすべて年代で示されていることからも明らかであろう。

3.2　新たに入ってきた移民による差別

メダリオン市では，黒人と白人がボトムと谷間のタウンとに棲み分けて暮らしていたが，その他にアイルランド移民も「約束の地」（53）を求めて移り住んでいた。アイルランド移民の 10 代の息子たちは，集団で黒人の子どもたちをいじめた。

> しかし，少年たちが見いだしたのは奇妙な訛り，彼らの宗教への行き渡っている恐れ，そして仕事を見つける試みへの執拗な抵抗であった。ただ一つの例外を除いて，古くからの住民は彼らを軽蔑していた。例外は黒人コミュニティだった。ニグロの

いくらかは南北戦争の前からメダリオンに住んでいた。たとえ彼らがこうした新しい入植者を憎んでいたとしても，その憎しみは表に出なかったので問題にならなかった。実際，黒人をいじめることは白人のプロテスタントの住民が一致協力する一つの行為であった。アイルランド移民は，黒人に対する古くからいる白人居住者の態度を真似る時にのみこの世界での場所を部分的に確保できたのである。(53)

彼らによる黒人の子どもたちへのいじめについてモリスンは，上記の引用のような論評を加えている。つまり，カトリック教徒のアイルランド移民の息子たちは，古くからいるプロテスタントの住民から彼らの奇妙ななまりや宗教のために，就業上の差別を受けていたが，それは表沙汰にされることがなかった。その隠蔽された差別に苦しめられた彼らは，白人をまねて黒人をいじめることによって自分たちの鬱憤を晴らすと共に，このことによってアイルランド系移民は，古くからいる白人の仲間入りをしたつもりになることができるのである。ここには人種による差別の階層構造が認められる。ボトムもアメリカの他の地域と同じように複雑な人種関係の中で，最底辺の黒人への差別が助長され，強化される構造を持っていたことをモリスンは見逃してはいない。そうした差別の構造は，若い世代の間でとりわけ露骨に行われ，黒人の思想に深い影響を及ぼすことになる。

第一作においては黒人の階層分化による黒人同士の差別の構造が示されていたが，『スーラ』では，他のエスニシティに属する人々からの黒人への差別的な行為が描かれている。この違いは，第一作では1940年代が舞台となっていて黒人間の階層分化が進んでいたが，『スーラ』では1922年が舞台で，アメリカ社会に移民が大量に入り込んできた時期に重なりおり，アイルランド系移民は大都市におけるいわゆる「新移民」に押し出されて中西部に移り住んできたためであると考えられる。『スーラ』では黒人間の階層格差についてはほとんど言及されておらず，主要に登場するスーラとネルの家族は比較的裕福な暮らしぶりであった。スーラのピース家は，祖母のエヴァが不在中に何らかの方法で得た収入によってかなり大きな家に住んでいたし，ネルの父は船乗りであった。スーラとネルの家族は共に南部出身の黒人だが，ネルの母はニューオーリンズ出身のクレオールでカトリック教徒で，比較的皮膚の色が薄い黒人であった一方，スーラの家は祖父母共に南部の出身で肌の色は黒かった。ネルの家は核家族で，白人の生活様式に深く染められた暮らしをしており，他方スーラの家庭は血縁と非血縁の人々が同じ屋根の下に住む大世帯で，白人の生活様式からの影響は比較的少ない暮らしであるという対照が見られる。

第一作におけるブリードラヴ姉妹は，黒人の子どもたちからいじめられるピコーラを助けたが，ピコーラ自身はこのいじめに対抗することは出来なかった。ブリードラヴ姉妹とピコーラとは貧しさの点で同じ階層に属している一方，ピコーラをいじめた子ども

たちは，経済状態，肌の色の程度，そして親の教育程度のどれにおいてもブリードラヴ姉妹やピコーラよりも上位の階層に属していた。あらゆる点で劣位にあるピコーラにはいじめに対抗する力はなく，彼女は黙ってそれに耐えていた。これに対してスーラは，アイルランド系移民の子どもたちからのいじめに対して自ら対抗し，自分の指を切って見せることによって自力でいじめっ子を撃退する(54)。スーラのこうした行動には，自己肯定という力に支えられて，いじめに対抗する能動的な態度が見られる。

3.3 「ボトム」と戦争

この小説の底には，戦争と平和のテーマが終始流れている[10]。この点を最も強く印象づける人物は，シャドラックである。彼は第一次世界大戦に従軍した後 22 才でボトムに戻るが，小説では最初の 1919 年，1922 年の章と中ほどの 1941 年の章，そして最後の 1965 年の章に登場する。彼は 19 才でフランス戦線に送られる。銃撃戦で首を吹き飛ばされたにもかかわらず，なお全力疾走する友兵の姿を目の当たりにして強い衝撃を受け，帰還後も狂気と正気が交錯する戦争神経症（シェルショック）を患い，ボトムの川岸の小屋に生活する独身男性である。彼は，「全国自殺記念日」を創設し，1920 年から毎年欠かさず 1 月 3 日に一人で行進を続けた。彼の考えでは 1 月 3 日だけは自殺やお互いの殺し合いが許される日であるとし，この日が来ると牛の首につるすベルを鳴らし，首吊り用の縄をもって人々に触れ歩いた。近隣社会の黒人たちは，初めはシャドラックに恐怖感を抱いたが，しだいにこの記念日に無関心になっていったかに見える。しかしシャドラックは，酔っ払って騒ぎ，突拍子もない行動を取りはするが，住民に危害を加えるわけではなく，週に 2 回，川で釣った魚をボトムの住人に売り歩き，魚が獲れない時は近隣の人々の手間仕事などをして生計を立てた。彼は近隣社会から排除されることはなかったのである。ボトムの人々は，毎年の行進に参加はしなかったが，「全国自殺記念日」は，黒人の日常生活に浸透し，「たやすく，しかも静かに，オハイオ州メダリオンのボトムにおける生活の織物の一部」(16) となり，ボトムの人々に戦争を常に想起させることになった。

もう一人の第一次世界大戦の犠牲者として，エヴァ・ピースの末子，プラムがいる。彼はハンサムな黒人青年だったが，従軍中に使用した薬物中毒のため，廃人同然になって母エヴァの家に戻った。やがてプラムはエヴァの手によって焼き殺される。

このようにボトムの住民は，46 年もの間第一次世界大戦のトラウマから自由ではなかった。この作品が出版された 1973 年は，ヴェトナム戦争の泥沼化，反戦運動の激化，アメリカ軍のヴェトナムからの撤退の時期と重なっている。黒人は，植民地時代以来アメリカが関わったあらゆる戦争や内戦に見えない存在として参加し，死を賭して社会の最底辺で国家を支えた。心身に傷を負って生き残った兵士は，故郷に帰還し，そこに生きた。つまり，近隣黒人コミュニティが戦争の犠牲者を長年にわたって引き受けたことに

なる。これは，ボトムに住む黒人たちの踊りや，笑いや，身体のどこかに潜む「大人の痛み」（adult pain）の一つなのである。モリスンは，この事実を過去のこととして語りながら，間接的にこの小説の出版時のヴェトナム戦争とそれに従軍して死亡，または心身に障害を受けた黒人兵士たちと重ね合わせて，戦争への時論的なメッセージを発信していると考えられる。

また，戦争への批判と共に平和への希求というもう一つのモリスンのメッセージを私たちは読み取ることが出来る。それはまず，スーラとその家族の姓がピースと名づけられていることから伺える。また，最後の1965の章にネルがスーラの墓を訪れた場面がある。その墓碑銘には，メダリオンの黒人社会の習慣にならって，死者の生まれた当時の姓と生きた年代だけが刻まれていた。

> それらは一緒になって典礼聖歌のようであった。ピース1895－1921，ピース1890－1923，ピース1910－1940，ピース1892－1959
> それらは死者ではなかった。それらは言葉だった。いや言葉ですらない。多くの願いであり，憧れであった。（171）

ここでの典礼聖歌（chant）は，死者への鎮魂と平和の希求の歌と受け取ることができる。

3.4　おびただしい死とその意味

この小説にはおびただしい数の死者が描かれている。その数は一つの小説中に起こるものとしては異常とさえ思われる。ネルの曾祖母の死，プラムの焼死，チキンの死，ハナの焼死，スーラの孤独死，そしてトンネルの落盤による大量死などである。その他に，スーラ3才での父親の死，ネルの曾祖母の死，帰郷後したスーラを見た瞬間に骨をのどに詰めて即死したフィンリーの死などがある。これらの死は，殺人，事故死，病死とさまざまであるが，ネルの曽祖母の死を除けば，全てボトム内で起こった事である。作者はなぜこのように多くの死を一つの小説の中に書き込んだのであろうか。

まず，アメリカの黒人にとって死はその歴史を通じて何時，どこで起こっても不思議ではない日常的な出来事であったことが指摘できる。それは，黒人がアフリカから奴隷船に乗せられて以来のことであった。第一次世界大戦に従軍し戦死した黒人たちばかりか，第二次世界大戦，ヴェトナム戦争においてその犠牲者はさらに増大した。また，1910年から1920年にその団員が最高数に達し，とりわけオハイオ州において隆盛であったKKK団による黒人へのリンチ，暴行を合わせて考えれば，この小説に見られるような日常的な死は，アメリカ黒人にとって避けがたい運命でさえあった。白人は，黒人の死，老い，そして病をあたかも存在しないかのように扱った。モリスンは，そうした黒人の運命を可視化するため，あえて黒人の死を描く必要があったと言えよう。つまり，黒人

社会を描くことは，その生にもまして死を描くことに帰結する。

したがってボトムには，黒人社会における生と死についての独特のとらえ方につながる死者と生者との間の往復運動がある。この小説の構成は，先に述べたように時系列的に年代で区切って出来事を記述しているが，その出来事と死者とは，この時系列的な年代を飛び越えて，再度あるいは再々度登場してくる。その例として，ネルにとってのスーラを挙げることができる。スーラの死後，ネルは改めて自分にとってスーラの存在が大きかったことを知る。スーラの死から25年後にネルは，スーラの祖母エヴァを老人ホームに訪れた後スーラの墓を訪れ，死んだスーラ，つまり死者との対話を通じて，あらたな自己を発見する[11]。

エヴァにとってのプラムもまたそうであった。エヴァは，自らが死へと追いやったプラムと死ぬまで対話を繰り返す。なぜエヴァは愛する息子プラムの命を奪ったか，どんなに病弱の幼いプラムを愛情込めて育てたかを。チキンとスーラやネルについてもそうであった。多くの登場人物は，死者との対話の中で自らの生を営んでいる。

こうした死者との対話は，生者にとっては内省であり，生者が生前の死者といかに深い人間的な絆をもっていたかを物語っている。この意味で「死者との連鎖としての生」の体験は，アメリカの黒人のものの考え方の特徴を示しており，これは黒人文化の一つの要素であると言えよう。

3.5　噂と中傷，そして解放の場としての近隣同士の交流

第一作における黒人近隣社会と同様にボトムは，常に肯定的なものとして捉えられていたわけではない。ボトムは，新しく起こった小さな事件，誰かが発した噂が素早く，時には大げさにボトム中に伝わり，それらを誰もが信じてしまう場所であった。そうした噂の発信人や，伝達人に男女の区別はなかった。10年間の不在の後，まるで映画女優のような装いのスーラの突然の帰還は，駅に降り立つやいなや評判となり，この知らせは，彼女がボトムへの長い坂道を歩いて登る間にすでにボトム中に行き渡っていたとする。[12]また，スーラが「白人と寝ている」との噂を立て，スーラにシャドラックと同じ悪魔のレッテルを貼ったのはボトムの男たちだった。珍しくシャドラックが悪魔のスーラに挨拶したために，眼にものもらいができたなどという些細な噂が，人に伝わるにつれて増幅され，強調されて近隣にまき散らされた結果，スーラは正真正銘の悪魔に仕立て上げられるのだ。ここには，ボトムという小さな近隣社会が人間関係が濃厚で，互いに関心を持ち合っているために起こす否定的な側面が描き出されている。

他方で，こうした近隣の人々による生活の場での交流こそが，貧困や白人の差別のもとで働き，生活することから来る黒人男女の苦悩や苦痛を和らげ，解放する場ともなっている。女たちは三々五々お互いの戸口などでおしゃべりを楽しみ，男たちはボトムの中でも娯楽施設が集まっているカーペンター通りにたむろし，日常的に交流が繰り広げ

られていた。また黒人の男女は，路上で談笑し，楽器を交えた歌や踊りに興じた。モリスンはその光景を小説の冒頭で次のように述べている。

> 谷に住む白人は，たまたまその丘に用事－家賃や保険の掛け金の集金など－があって登って来ると，花柄の服を身につけた黒人の女が，ハモニカの調べにあわせて，ケイキウォークやブラックボトムを少しだけ踊ったり，だらだらと歩き回ったりしているのを見かけるかも知れない。彼女の裸足がサフラン色の埃を巻き上げ，それがハモニカに興じている男のカヴァーオールや破れた靴の上に薄く積もっていた。この女を眺めながら，黒人たちは，膝をこすりあわせて笑う。谷間の白人は，その笑い声を聞くことはあっても，黒人たちの瞼の下，頭に巻いたぼろ布，柔らかなフエルトの帽子の下，手のひら，すり切れた襟の折り返し，曲がったふくらはぎのどこかにこっそりと潜んでいる大人の痛みに気づくことは全くないだろう。(4)

黒人の踊りや笑いには，アメリカの黒人であることの悲哀，苦痛，絶望，貧しさ，失業，などの「大人の苦痛」(adult pain) が秘められているのだが，それを谷間に住む白人たちは気にとめることは全くなかったと記されている。そしてモリスンは，「それにもかかわらず，丘の上のボトムに住むのは楽しかった」(5) と記している。

チキン・リトルの葬式後の光景にもボトムが黒人たちにとってどのような意味を持つ場所なのかが語られている。

> それから彼らは教会の席を立った。人はいくらかの感情に耐えなくてはならないから。彼らは胸がいっぱいで，何かを吐き出す必要があったため，話をした。彼らはからだをゆすった。悲しみや陶酔の小川は，ゆさぶられる必要があったから。彼らは小さな閉じられた棺に閉じこめられる生と死のことを考えて，踊り，金切り声をあげた。(65-66)

黒人たちは，踊りや叫びによって幼いチキンの死を自らの全存在で受け止め，やり場のない深い悲しみの感情に耐えた。ここには，近隣社会の一人の幼い子どもの死を心から悼み，幼い命を失った悲しみに共感する黒人たちの姿が見られる。

3.6　痛みの分ちあい

スーラの祖母エヴァは，近隣の人々の物心両面からの助けによって，夫の出奔後に残された幼子を育てた。そればかりか，その後彼女は近隣の女性たちに三人の幼子を託して，18ヶ月もの間ボトムを留守にした。そのことは，ボトムの住人は皆貧しいけれど，親が不在の子どもたちを食べさせ，世話をし続けるほどの懐の深さを持っていたことを

物語っている。それは，ボトムでは，各家族が互いに閉じられていないこと，日常的な繋がりの中でエヴァという黒人女性を近隣の人々が熟知していること，他人の子どもをわが子と分け隔てなく育てる習慣があることを示している。エヴァは 1 年半後に片脚を失い，裕福になってボトムに戻るが，その後比較的大きな家を建て，そこに近隣の子ども三人を養子に迎え，家のない若夫婦に部屋を貸し与え，近隣の人々が絶えず出入りする，外に解放された大家族の主となる。

最終章で，時代を経てすっかり変貌したボトムに対するネルの心情が以下のように描かれる。「ああ，時は何と早く過ぎ去ることか。彼女は町の人を見分けることがほとんどできなかった」（164）彼女はボトムに住む黒人が少なくなり，いくつもの老人ホームが建っていることに驚いた。また川縁やカーペンター通りの取り壊されていないところに集まり住むわずかな黒人を除けば，土地の価格が上がり，そのため裕福な白人が移り住む「郊外」に変貌した様子を目の当たりにして，ネルはかつてのボトムは崩壊してしまったことを認めないわけにはいかなかった。そしてネルは，「悲しかった。なぜならボトムは本当によい場所だったから。若い人々は，コミュニティについてよく話していたのに，彼らはこの丘を貧しい人，年取った人，頑固な人，そして金持ちの白人に残して去っていった。多分そこはコミュニティではなかったのであろうが，よい場所だった」（166）と考える。この年以後黒人に市民権が与えられることになったが，ボトムの黒人は未だ自治組織であるコミュニティの一員としての権限は与えられていなかったに違いない。したがって黒人は，ゴルフ場や老人ホームの建設など都市開発についての発言権を持たなかった。

ボトムに老人ホームがいくつも建設される事態は，黒人近隣社会の崩壊を示している。というのは，近隣同士の行き来が頻繁な黒人の近隣社会では，隣の人々が頻繁に立ち寄って用を足してやることで老人の介護はまかなわれていた。ネルは「ホームを建てることもないのに」と考えた。事実白人たちは家族が年取ると悩むことなくホームに入れるが，黒人たちはそうするかどうか悩む。黒人社会では，独居の老人でさえ，手に負えなくなるまではホームには入れることはなかった。貧困と差別の中を生きてきた黒人たちの生活習慣や文化にはこのように相互扶助の思想が含まれていたのである。

3.7　悪魔的存在をも含み込むボトム

はじめボトムの住人は，自殺記念日になると凶暴な眼をして髪を振り乱し，雷のような声で，ベルを鳴らして行進するシャドラックのことを恐れ，悪魔と呼んだ。しかし，不安は残ったものの，彼の狂気の限度と性格が解ってくると，週に二度彼が売り歩く魚を買い，手間仕事を頼むなど，彼をボトムの生活組織の一部に含み込んだ。自殺記念日にもボトムの大人たちは，行進に参加することも，話題にすることもなかった。しかし彼らは「それを自分たちの思想，言語，生活の中に吸収してしまっていた」（22）のであ

る。このように異物を既製の文化に織り込んで新しい文化を編み出していくことは，閉鎖的で，混じりけのなさを追求し，白か黒かを明確に判別しようとする白人の文化においては起こりにくいことであった。

また，帰還後のスーラは，ボトムの住人にとってまさに「悪魔」そのものとなった。祖母のエヴァは，スーラの少女期にすでにその魔性を見抜いていた。エヴァによれば，スーラの母ハナが焚き火の不始末から庭で火だるまになったとき，スーラはその光景を傍らで興味深げに眺めていたというのだ。スーラは住み慣れた祖母エヴァの家に着くやいなや，祖母と壮絶な口論を展開し，祖母を老人ホームに送り込んでしまった。スーラは親友ネルの家庭を訪れるようになり，やがてネルの夫ジュードと性的な関係を持ち，ジュードはネルと子どもたちを捨てて家を出た。その後間もなくスーラはジュードと別れ，ボトムの男たちのうち気に入った者とは誰とでもとベッドを共にした。

ボトムの人々は，スーラが祖母を地域でも評判の悪い老人ホーム「サニーデイル」に入れたと聞いて，彼女を「ゴキブリ」と呼んだ。次いで彼女がネルからジュードを奪ったと聞いて「あばずれ女」と呼んだ。その上，黒人の男たちはスーラに「白人男と寝た」との噂を立てた。黒人の女が白人の男と寝ることは，黒人コミュニティにおいては最も恥ずかしく，卑しいことであった。黒人の男たちは「白人男と黒人女の結びつきはすべて強姦でしかない」（113）と主張した。したがってこの汚い噂を聞いたすべての人は，スーラに対して心を閉ざした。そしてスーラを完全な悪魔に仕立て上げ，悪魔から身を守り，悪魔を監視した。モリスンは，このとき彼らはハナや自分たち自身の身持ちの悪さを棚に上げていること，幾分肌の白い黒人が家族内にいることは家族内の誰かが白人と交わった証しであり，黒人の男は白人女とベッドを共する密かな願望を持つのだということを無視したのだと付け加えている。

> そのため彼らは夜になると入り口のドアに箒の柄を置いたり，玄関の石段に塩をまいたりした。しかし，彼女の足跡から塵を集めようとして失敗したことを除いて，彼らは彼女を傷つけることは何もしなかった。いつものように黒人たちは悪を石のような眼で眺め，そのままにしておいた（113）。

彼らはスーラを罵り，忌み嫌った。けれども上の引用に見られるように，この悪魔をボトムから追放することも，リンチに架けることもしなかったし，そんなことを口に出すこともしなかった。むしろボトムの女たちは，スーラという魔物から身を守るため，夫を大切にし，道徳的になり，仕事に精を出すようになった。スーラという存在のお陰でボトムは，逆に緊張感と生気を取り戻したのである。スーラもまた黒人社会の舞台装置の一部になったといってよい。

このようにボトムは，悪を絶対化せず，断罪せず，異端を包み込む懐の広さと深さを

持っている。これこそ白人文化とは異なる黒人の思考と行動の仕方と考られる[13]。

3.8 善と悪の共存

この小説においては，善と悪との明確な腑分けがされていない。時に善と悪とは逆転しうることが示されている。そうした逆転に込められているのは，白人社会の決まり切ったステレオタイプ的な生き方や価値観に深く影響され，想像力や，みずみずしい感性を押さえ込んでしまったネルの生き方を善とし，他の異なる生き方や価値観を容認しない頑なな態度への批判であろう。ネルは，親友スーラを失って初めてスーラの存在意義を理解し，自分がスーラの持つ一面を欠落させて生きてきたことに気づいた。またボトムの人々に悪魔と断定されたスーラは，死の病を独りで耐え，ネルを除いてボトムの人々の立ち会いもなしに埋葬される。スーラの死後，トンネル事故のために大量の死者を出し，ボトムは急速に崩壊への道をたどる。

ボトムでは，悪が善によって徹底的に滅ぼされることがなく，悪が善と共存した時，その社会が機能する。ここには悪と呼ばれるものは本当に悪なのかという問いかけがあり，悪と善の境界線を引くことはできず，むしろ悪の根絶は人々とその土地と住民に不幸をもたらすことが示されている。

悪を排除することは，実は自分たちにとっての異物を排除することであり，異物を排除することは，その社会の懐の深さを失うことになる。スーラを悪として孤立させたことはボトムそのものを崩壊へと導くことになったのだ。

以上，この小説に書かれた黒人近隣社会「ボトム」のさまざまな特徴を述べてきた。次の章では，このボトムに生きる黒人の生について，その特徴を明らかにしたい。

4 ボトムの黒人の生——スーラとネルの場合

ボトムに生きた黒人の中で主要な登場人物であり，若い世代に属するネルとスーラに焦点を絞ってその生のあり方を検討する。まずこの小説の登場人物に共通する外面的な特徴について見てみよう。

4.1 共通する外面的特徴

(1) ボトムの外の生は謎——エヴァとスーラ

アメリカの黒人は，とりわけ南北戦争後，南部から北部へ大量に移動したが，その移動は単線的ではなく，生きる場所を求めて全米各地を転々としながら北へ向かうことが多かった。ボトムもその例外ではなかった。ボトムから出て行った黒人の男にはジュードとエイジャックスがいる。ジュードはデトロイトに向かい，エイジャックスは，航空ショーを見るためオハイオ州のデイトンに向かった。

ネル，スーラ，エヴァ，シャドラックは，いずれもその生涯で一度ボトムから出ている。ネルのニューオーリンズへの旅は，1920年の章に詳しく述べられている。彼女の母エレーヌと共に死の床にある曾祖母を訪ねる旅は，彼女の自己発見の旅であり，以後の彼女の人生に大きな影響を及ぼした。またシャドラックの場合は，フランス戦線でシェルショックを受け，精神病院，刑務所を経てボトムに帰り着くまでの心の軌跡が詳しく描かれる。

ところがスーラとエヴァについては，ボトムの外での体験はほとんど語られず，謎として残された。スーラは，親友ネルの結婚式が終わるとボトムから姿を消した。10年後に戻ったスーラは，ネルに「話してよ。大都会のことを」（99）とうながされるが，言葉少なであった。彼女はカレッジの学生としてキャンパスにいたと答える。ネルが「カレッジに10年もいられないでしょ。ナッシュヴィルにいたと聞いたけれど」（99）というが，答えはなかった。ボトムの外の生活はスーラにとって退屈なものだったとの記述がある。彼女は，南部，東部，西部の大都市を転々としたが，これらの都市には「同じ人々がいて，同じことを話し，同じ汗を流して」（120）いた。男たちは皆，同じ愛の言葉，同じ愛の慰め方，同じ愛の冷め方に溶けて一つになっており，「彼らは，彼女に愛の技巧だけを教え，悩みだけを分け，金だけを与えた」（121）。

エヴァはボーイボーイの出奔後，食糧にも事欠くようになり，途方に暮れた末幼子たちを隣家に託してボトムを後にし，18ヶ月後に一本足になって戻った。この間彼女がどこで何をしていたのかについての真相は，いずれも噂の域を出ず最後まで謎であった。シカゴにいたことを示す記述が一カ所で出てくるのみである。

(2) アメリカ黒人であることの刻印

アメリカにおいて「黒人であること」はボトムに住む黒人たちの人生に大きな陰を落としている。とりわけこの小説に描かれた年代は，アメリカの発展がめざましく，「アメリカ的生活様式」が全米に普及する時期であるが，黒人は苛酷な制約の下で困難な生を生きた。

シャドラックは，精神病院の隔離病棟をわずかの現金と衣服を支給されて退院したが，外に出ると，めまいや冷や汗に悩まされ，弱った足でようやくある町にたどり着く。彼は何も持たず，職業も住所もなく，一体自分が何者なのか解らず，加えて激しい頭痛に襲われ，声も立てずに泣いた。やがて浮浪と酩酊のかどで留置所に入れられた。そこで彼は「自分の顔を見たい」(13)という欲求に駆られ，鏡もないため，便器に溜まった水に映った自らの「黒い顔，黒い肌」を認め，ようやく安堵して穏やかな眠りにつくことができた[14]。このようにシャドラックが自らを認める第一義的な要件は，自分が紛れもない黒人であるということであった。

一方，ネルとスーラの二人は12才の時すでに「何年も前から，自分たちは白人でも男性でもなく，したがってすべての自由と勝利は禁じられたものであることを発見してい

た。そして自分たちがなりたい何か他のものを創り出そうと考えていた」(52) のである。このように二人の少女は，アメリカ黒人であり，しかも女であることの運命を深く心に刻んで，自らの人生を歩んだ。

(3) 強烈な原体験

人は過去の体験や記憶から自由ではあり得ず，人生を歩む上で強烈な原体験が大きな意味を持つことが，この小説の主要な登場人物を通して描かれている。モリスンの記述には，人が育つ環境と過程での経験がその人の生き方を決める上で大きな比重を占めることが多く見られる[8]。人間や社会への認識の持ち方は，その人の過去からの生き方の累積によって示されるとの人間観からきているのであろう。この点では第一作においても同様な手法が用いられていたことが想起される。

スーラは，母が「スーラを愛しているが，彼女のことが好きではない」(57) と友人に話しているのをたまたま立ち聞きして激しい衝撃を受けた。彼女は自分に対する母の見方を知って，母を含めた他人は当てにならないと考えた。その後誤ってチキンを死に追いやってしまった自責から，自分自身も当てにならない存在であると考えるようになった。それ以後スーラは，他人や自分を信じること—語り手モリスンはそれこそが人間を成熟させる要因なのであるとしている—ができなくなった。そのためスーラは「自分に中心がなく，成長する上での核がない人間になった」と記されている。

シャドラックのフランス戦線での強烈な体験は，死への恐怖を彼に刻印した。その結果彼は，すべての人が死から免れ，一年の残りの日々は死の恐怖，死にたいという誘惑から解き放たれて生きることができるようにと願って，一年に一度だけ死に捧げる日，「全国自殺記念日」を発案し，翌年の1月3日から毎年この行事を続けた。

ネルにとって，母と出かけたニューオーリンズへの旅が彼女の原体験であった。ネルは旅の終わりに次のような認識に達した。

> 「私は私」，「私なの」と彼女はつぶやいた。
> ネルは，何を意図しているのか十分には解らなかったが，一方で彼女は何を意図しているのかをはっきりと解っていた。
> 「私は私。私はあの人たちの娘ではない。私はネルではない。私は私。私なの」(28)

この旅を通じてネルは三つのことを心に刻んだ。第一に母の出自，つまり南部的な文化と南部の娼婦であった祖母から母に伝わる文化からの決別である。南部ニューオーリンズへの旅は，黒人用の客車を何度も乗り換える長旅であった。最初の汽車に急いで乗り込んだエレーヌとネルの母子は，誤って白人用の客車に乗り込んでしまった。すぐに黒人専用と書かれた客車に移ってそのドアを開けると，そこに白人の車掌がいてネルの顔をじろじろ眺めて指で耳をほじりながら，「何をしていると思っているんだ，ねーちゃ

ん（gal）」（20）と言った。その言葉はエレーヌにニューオーリンズの娼婦の家の赤い鎧戸を想起させ，衝撃を与えた。なおもエレーヌ母子をとがめ立てする車掌に向かって母は，無意識に「幻惑させ，媚びるように」（21）笑ったのである。ネルは母の持つ娼婦的な要素，つまり母の白人男性の前で媚びを売る様に，それは男への媚びであると共に白人への媚びであるという二重の媚びへつらいであったから，強い嫌悪感を抱いた。ネルのこの嫌悪感はこのときの母を見ていた黒人乗客の厳しい批判のまなざしを意識することによっていっそう強まった。エレーヌの母は，クレオールの娘で，ニューオーリンズの娼婦として働いていた。しかしエレーヌは，祖母の計らいで幼い頃から娼婦の母の元を離され，厳格なカトリックのしつけによって育てられた。しかし母親の文化が無意識のうちに受け継がれ，とっさの時に媚びへつらいの笑いとして現れた。

第二に，南部への旅を通して彼女はアメリカ社会における黒人の位置をはっきりと知らされた。南部の汽車は1920年当時黒人と白人の車両が歴然と隔離されており，黒人が白人の車両に足を踏み入れることはタブーであった。誤って白人車両に乗り込んでしまったネル親子は，まず白人車掌から侮辱的な態度をとられた。また白人用の車両には便所が設置されていたが，黒人用の車両にはそれがなかった。そのためネル親子は，必要が生じると停車中に急いで汽車から降り，駅の周囲にたむろする白人の視線を気にしながら草むらで用を足さなければならなかった。この屈辱的な体験は，ネルの脳裏に焼きつき，彼女は黒人が置かれた位置から脱出し，自分らしい生き方を模索することになった。

第三に，母の「白人に媚びる笑い」を見た黒人の反応，つまり徹底した敵意と憎悪のまなざしを目の当たりにした体験から，ネルは白人から見て黒人の自分はどう受け取られるのかを常に年頭に置いて自らの行動を決する態度を学んだ。

このように12才で初めて南部社会を見たネルの印象は強烈であり，この体験は後のネルの生き方に少なからぬ影響を与えた。このネルの体験は南部社会を知らず，黒人近隣社会の中で成長したスーラとは対照的であった。

4.2　スーラとネルの自己探求

以上の原体験を持ったネルとスーラの相異なる自己探求の軌跡を追うこととする。

ネルの父ワイリー・ライトは五大湖航路を航行する船のコックで，月に一週間ほど陸に上がる生活である。ワイリーは，南部を訪れたとき出会った美しいエレーヌと結婚し，メダリオンの瀟洒な家に居をかまえた。そして結婚9年目にネルが生まれた。核家族で，夫はたまにしか帰宅しないため，エレーヌにとってネルは，人生の慰めであり生きがいとなった。エレーヌは，ネルを従順で礼儀正しく白人社会が望むような黒人の女の子に育てた。そうして彼女は，「ネルが示すほんのわずかな熱情さえも冷ましてしまい，ついには彼女の想像力を地下に追いやってしまった」（18）のである。だが，先述のように南

部旅行の体験から，彼女は母の南部文化と一線を画する自分らしい生き方を強く求めてもいた。

一方スーラは，祖母エヴァが建てた部屋数の多い家に住み，官能的で男性との自由な交際を常とした祖母と母ハナ，それに叔父プラム，そして祖母エヴァが養子として連れてきたデューイ 3 兄弟，その他新婚のカップルなどの間借り人が同居する大家族の中で育った。家の中はいつも散らかっており，人の出入りが頻繁で賑やかではあるが無秩序の中で，彼女は規範や秩序を強制されず，比較的自由に育てられた。母ハナの自分に対する言葉や，過失で少年を死に追いやった体験からスーラは，他人も自分も信じることができなくなり，全く新しい自己を創造しようと考える。

以上のようにネルとスーラは，一方は厳格で清潔な核家族，他方は自由で無秩序な大家族に育ったという点では対照的であったが，共に母親の権威が強く（ネルの父は不在がちであり，スーラの父は 3 才の時に死別している），黒人の中では比較的経済状態がよい家庭に育ったという共通点があった。また共に黒人の女に生まれた限界を認識し，その上で自分らしい人生を切り開こうと模索していた。二人はふとしたきっかけで知り合い，意気投合し，たちまち親友になる。ここから二人の自己探求と自己創造の実験が始まる。

結論的にいえば二人とも，探し求めていた真に個性的で，創造的な生き方を発見したとはいえない。それはなぜだったのか，二人の軌跡を追いながら検討してみよう。

(1) ネル――環境に適合的な生き方

ネルは 12 才の時にスーラに出会い，二人の友情は急速に強まった。二人を引きつけたのは，互いの深い孤独感と，誰か同じ思いを共有する他人を求める思春期特有の夢見心地だった。こうして相手の人格に救いを見いだした。感受性，想像力が鋭く，移り気だが競争心のないスーラに比べ，ネルはしっかり者で，首尾一貫していたが，状況に自分を適合させるところがあった。互いに好奇心，探求心は旺盛であり，とりわけ異性への関心が強くなっていた。ある日，二人が川下のほとりの茂みで砂穴づくりに熱中していると，少年チキン・リトルが草をかき分けてやってきた。スーラはチキンを近くのブナの大木に登らせて遊んでいたが，両手を掴んで彼をぐるぐる振り回した瞬間互いの手が離れ，チキンは川面に落ちていき，間もなく姿が見えなくなった。スーラは仰天して言葉もなかったが，ネルは冷静で，最初に口を開いて「誰かが見た」と言った。この一言にスーラは，川岸のシャドラックの小屋めがけて走った。シャドラックの答えは「いつもだよ」という曖昧なものだった。スーラはネルのもとへ戻り号泣したが，ネルはこのときも冷静にスーラを慰めて次のように話しかけた。

「シ，シ。泣かないで。泣かないで。あんたはしたいと思ってしたんじゃない。あんたのせいじゃない。さあ行こう，スーラ。さあ。彼はいたの？彼は見たの？」

（62-63）

ネルはチキンの葬式の席で，自分は何もしなかったが，有罪宣告を受け縛り首になったような思いであったが，その思いを心の奥にしまい込んでしまった。

スーラ不在のもとでのネルの結婚生活は彼女を変身させた。夫のジュードは，メダリオンホテルのウェイターとして働くかたわら男性四重奏のテナー歌手を務めており，女の子からも男の子からも好かれる青年だった。メダリオンとオハイオ川の対岸の町を結ぶ橋が架けられることになり，肉体労働に憧れ，橋の建設に夢を描いたジュードはその建設労働者として雇われることを強く望んでいたが，結局白人が雇われ，その望みは叶わなかった。彼は，その落胆と怒りのため，結婚によって男としての役割を果たしたいと考え，それほど結婚を望んだわけでもなかったが，ネルに強力にプロポーズした。彼は，妻を保護し，愛する一家の主人となり，妻ネルに対しては主婦として献身的に彼を支え，黒人であるために家庭の外で彼が受ける差別や鬱憤の慰め役を求めた。一方ネルは，ジュードの黒人としての境遇に深く同情し，スーラとの友情よりもジュードの妻となることを選びとったのである。こうしてネルは，母エレーヌのしつけ通り，夫に従属するよき妻であり，よき母である道を選び，すでに母によって摘み取られていた生気や輝きをますます無くしていった。ネルは特に結婚後は，白人社会に適合して生きる道を選び，黒人の男に依存，従属する黒人の女の生き方を選んだことになる。彼女は南部文化からの自立を誓ったが，結局北部文化，つまり白人の中産階級が理想とする価値観をすり込まれて育ち，それを選び取ったことになる。こうしてジュードとの「結婚が明らかにすべてを変えてしまった」（119）のである。

夫のジュードが去り，子どもが巣立つと，彼女は保守的なプロテスタントの教会員として奉仕活動に熱心になり，近くの老人ホームの慰問に歩いた。彼女は母の文化からの決別と自立をいったんは決意したが，スーラという導き手を失うと，結局伝統的なワスプの価値観に適合する黒人の人生を理想として生きることになった。

(2) スーラ—危険なほど自由な生き方への挑戦

スーラの帰還と共に襲来したワタリツグミの大群は，スーラのさらに黒く大きくなった目の横のあざと共にボトムの人々に不吉な兆候として受け取られた。ボトムの外での10年間に彼女がどのような生活をしていたかは定かではないが，その10年は退屈なもので，真の友人はできなかったし，交わった男たちは愛の技巧と金を彼女に与えただけであった。彼女がボトムに帰った動機の一つには，そこには親友ネルがいるためだった。だがスーラは，ネルに再会してみると少なからず失望した。

「あんたも変わってしまったわ。あんたに何もかもを説明しなくちゃならないことは今までになかったもの」。（100）

ネルが他の人々と同じ振る舞いをしたことは，彼女（スーラ＝引用者註）を少し驚かせ，ひどく悲しませた。(120)

ネルは，久しぶりに再会したスーラとの対話によってこの10年の結婚生活で味わったことのない機知にあふれた辛辣な対話，「深い笑い」が戻ってきたことに感激した。「スーラと話をすることはいつも自分自身との対話であった」(95) こと，その自己との対話を長く忘れていたことも思い起こした。一方スーラは，何事も根掘り葉掘り問いただし，それに分別ぶった説教をするネルにいささか失望し，退屈になり，悲しくなった。

エヴァの家に戻るや否や，スーラは90才の祖母エヴァと口論を始める。スーラに結婚して落ち着くことを薦めるエヴァに向かって彼女は，「私は誰か他の人間を創りたいとは思わないわ。私自身を創造したいの」(92) と言い放つ。女性として結婚し母となる人生を孫に薦めるエヴァをスーラはきっぱりと否定した。白人にも黒人にも深く浸透している価値規範にスーラは疑問を投げかけた。さらにエヴァは，ハナが火だるまになり，もだえ苦しんでいる様を目の当たりにしながら，助け出そうともせず，むしろ楽しんでいるかのように見ていたことを鋭く批判した。それに対してスーラは逆に，エヴァこそ実の息子プラム焼き殺したではないかと反論した。エヴァはスーラの他人への信頼と愛情の欠如を告発したのだが，スーラはこの口論の後直ちにエヴァをボトムでも最も評判の悪い老人ホームに入れてしまった。スーラは，感情に走って行動し，熟慮に欠けるところがあったが，冷静なネルがそばにいれば事態は異なったかも知れない。

このことはスーラが，伝統的な黒人女性の生き方を否定し，それとは異なる生き方を望んでいることを示しているが，そうした人生とはどのようなものなのか。そしてスーラの自己実現は可能だったのだろうか。

スーラは，とりわけ男女の最も緊密な関わりであるセクシュアリティにおいて男女の自由で平等な関係を重んじた自由の探求者であった。スーラのような黒人の女性の社会的な達成は，とりわけその時代には著しく制約されたものであった。したがってスーラの自己実現は，男女の親密圏における自由の探求へ向かった，あるいは向かうほかなかったと考えられる。だが社会的な不平等が存在する社会においては，親密圏での男女のあり方も当然制約を受けることは念頭に置かなければならない。ともあれスーラにとって異性との性的な交わりは自己解放の場であり，「それは彼女が求めていたものを発見できる唯一の場」(122) であった。ボトムの外でスーラは，祖母のエヴァや母のハナがしてきたように，これまで多くの男性たちと交わってきた。帰郷早々，彼女はネルの夫ジュードと性的関係を持ち，親友ネルと決別することになったが，間もなくそのジュードとも別れる。その後彼女は，ボトムの数多くの男性たちと性的関係を持ち，その妻たちから強い憎しみを受け，悪魔とののしられた。

ところが，エイジャックスとの出会いは，スーラがボトムの内外で味わっていた束縛

観や疎外感を解き放つことができ，多くの男からは味わうことができなかった真の意味での自由を満喫することができた。エイジャックス，チョリー，スーラは，芸術家がもつ感受性と想像力を持ち，モリスンが「危険なほど自由な人間」[15]と呼んだ人物である。彼らはあらゆることを体験し，失うものをすべて失った結果，すべてのものから自由になった存在なのである。スーラは，エイジャックスと対話することによって，これまで体験したことのない醍醐味を味わうことができた。

> ・・・しかし彼女の本当の喜びは彼が彼女に話しかけたことだった。二人は純粋な対話をした。彼は彼女を見下げた話し方をしたのでもないし，揶揄するわけでもなく，生活ぶりについて浅薄な質問も自分自身の行動についての独り言に甘んじてもいなかった。・・・・そしてその間中，彼は自分が話すことよりも相手の話に耳を傾けた。（127-8）

何よりもエイジャックスは，スーラと対等に話をし，自分の自慢話よりもスーラの話に耳を傾けてくれたのである。

スーラはまた，エイジャックスと真に創造的な性の交わりを体験することができた。彼と共にいるときだけは，男と女の性におけるステレオタイプを抜け出し，男女のあり方を自由に交替，逆転させることによって互いの役割を変換し合い，新しい関係を実感することができた。彼との性の絶頂においては，飛翔，オーガズムの後，彼女はあらゆる鎧を解き放って，ありのままの自分になることができ，ありのままの自分の姿をそれとして受け容れることができた。そして黒人であることの悲哀，孤立について一人だけの思いを馳せることができ，身体と心との対話が可能になったのである。スーラは生まれて初めて男女の結びつきにおいて，そうありたいと願っていた姿を発見し，親密圏における自己解放と自立を経験したといってよい。

しかし皮肉なことにスーラは，エイジャックスとの恋の高みにありながら，恋する女のステレオタイプに陥る。彼女はこれまで自分が唾棄してきた所有欲と独占欲に囚われるようになり，エイジャクスを自分のもとに引きとめるためリボンを身につけるなど身づくろいに気を遣い，家中を磨きたて，食事の準備をしてひたすら彼を待つようになった。スーラは，自分が自由になれたと感じた親密圏にまでも不平等と格差の存在する社会の制約を持ち込んでしまったのである。そうしたスーラの変身ぶりを認めた彼は，スーラに失望し，彼女のもとを去って何よりも興味を持っていた航空ショーへと旅立った。

スーラは，ボトムに戻って初めてエイジャックのような男に出遭うことができ，探し求めていた自由を得ることができた。しかしそれは長続きせず，破局に終わり，やがて彼女はするだけのことはし終えたとして，病の床に伏し，孤独の中で死を迎える。彼女の葬儀に参列したのは結局和解を果たさなかったネル一人であった。以上に見られるよ

うにスーラの自己発見の旅はここで成就したとは言えないであろう。彼女は自由を求めて飛翔したが，ボトムの人々からはパーリア（122）とされて孤立し，真の自由を獲得できたと彼女が考えたその瞬間に，彼女がそこから抜け出そうとしてきた白人の価値観，つまり独占欲と所有欲に囚われてしまったのだから。それほど白人社会の価値観は，彼女をはじめとする黒人の内面に深く浸透していたのである。

4.3　二人の自己実現の行方

このように見てくると，スーラとネルのどちらの自己実現も，結局中途半端なままに終わったといえよう。二人は互いに必要な半身であることには違いがなかったが，スーラはネルの分別や，忍耐に欠け，ネルはスーラの想像力と行動力，社会の批判に囚われない生き方を容認することができなかった。二人は合わせてやっと一人前だったのである。だが，合わせてやっと一人という生は，そのそれぞれにとって十全な生とは決していえない。

ボトムは，自己実現をめざす自由を二人に自覚させはした。その意味でボトムは，スーラが放浪した他の大都市にない可能性を持っていた。しかし黒人の全人格的な生を実現させることができなかったという点で決定的な限界を持っていた。それはボトムという不安定な土壌に起因しており，白人文化が支配していて，いかに意識的であろうとその文化が人々の生き方の中に侵入してくる黒人近隣社会が持つ限界を示していると言えよう。

そうした中でスーラは自由への果敢な挑戦をした。それはスーラが黒人の女性であり，その中でも最も周縁に押しやられた存在，つまり「パーリア」であったために可能であったのではなかろうか。もし社会の比較的中心に身を置いたとすると，ネルのように社会の支配的な価値観にどっぷりと染まってしまい，それを疑うことができない。その社会の周縁にいて，別の世界の価値観を知っているときにのみ，自分の社会の支配的な価値観を批判することができるのかもしれない。

一方ネルは，スーラの死後四半世紀を経てようやくスーラの存在意義を再認識し，自らの生き方を省みることになったのである。ネルの生は社会的に適合する人生であったが，彼女の自己解放や自己実現は十全なものとは言えなかった。

5　ボトムに描かれた黒人の死生観

ボトムは，白人社会に深く規定されて存在した。白人のジョークがもとになって白人から与えられた土地であったボトムは時代の変化に伴って50年足らずで崩壊していった。しかしそこには，白人の思想や文化に対抗できるような発想や思想がいくつか見られた。この点を考察して締めくくりとしたい[16]。

5.1　戦争忌避と平和の思想

この小説の冒頭から最後の場面にまでシャドラックを登場させることによって，読者に戦争とそれがもたらす後遺症を終始想起させ，平和への希求が示されている。アメリカに住む黒人は，戦争，リンチなどで日常的に死と直面して生きたが，集団で人を殺したり，人に危害を加えたりはしない。黒人は，文化を異にする人々を批判したり，噂したりするが，彼らの生命までも奪おうとはしない。暴力には暴力によって対する，という考え方は黒人の文化にはなかった。シャドラックの行為は，ボトムの人々の日常生活に浸透し，一つの思想となった。

5.2　異端をも包み込むボトム

ボトムの人々は，スーラにもシャドラックにも悪魔のレッテルを貼ったけれども，結局のところ二人をボトムから追い出すことはなかった。「黒人たちは彼女に危害を加えたりはしない。玄関の石段に塩をまき，玄関に箒の柄を横にして置くなどして魔よけのまじないをするだけだった。黒人は邪悪なものを石のように眺め，放っておいた」（113）と記されているように，異質な存在は織物の模様の一つと見なされ，黒人文化の中に包み込まれたのである。

また何らかの異端，悪の存在には人々の中に善を生み出すという効用があることも示されている。スーラの存在は，ボトムの人々を緊張させ，自分の中の悪とされるものを排除させた。人々が彼女の魔性を確信するようになると，女は以前より男たちを大切に扱い，子どもたちに愛情を注ぎ，自らの立ち居振る舞いを気遣うという変化が生じた。

5.3　善と悪との関係の相対化

さらに悪と言われるものは本当に悪なのかという問題提起もここには示されている。ボトムに戻ったスーラに対して人々は，恐れと不吉な予感を抱き，やがて彼女を悪魔と見なした。しかし彼らはその悪魔を根絶しようとはせず，それを避け，それから身を守ろうとした。「彼らは怒りの感情はよく知っていたが，絶望は知らなかった。さらに品位に係わるから自殺はしないと決めていた。これと同じ理由から，彼らは罪人に石を投げることもしなかった」（90）のである。悪魔と見なされたスーラも「スーラは決して競争しない」（95）とネルがいうように人々に対抗することはなかった。それは，善の力以外の様々な力にも何らかの正当性があることを人々が認めていた結果なのであろう。疫病や干ばつは，季節の循環と同様に自然なことだった。洪水，白人，結核，飢饉，無知などの避けがたい厄災から生きのびることこそ彼らの最大の問題であった。スーラの存在もこの厄災の一つだったのだ。こうした思考方法は，黒人がアメリカ社会を生きてきた歴史から学んだ達観なのであろう。だが，彼らは小説の終わりには，スーラを人々はパーリアと見なしてボトムから完全に孤立させ，孤独死させた。しかしスーラはそれを知

った上で，病からの痛みに耐え，孤独の寂しさに耐え，最後まで自分自身であることを貫こうとして，孤独のうちに死を迎えた。悪魔のスーラの死後，トンネル工事に黒人を雇用することが公表され，黒人向けの無料の老人ホームが新たに建てられ，エヴァもそこへ移された。こうしてこれまでのボトムの思想に反して悪とみなしたものを徹底的に疎外，排除したことによって，結局ボトムは崩壊への道をたどったと言えよう。

ここには，善と悪とは定義できないものであり，善と悪との腑分けも状況や歴史によって変化しうる相対化なものであるから，善も悪も排除せず共存させるという，ボトムの人々の思想と呼んでもよい考え方が示されている。

5.4　生と死の連続性

この小説にはおびただしい死が描かれていることに注目した。ボトムにおいて死は日常的なことであり，生きている人々は死者と共に生きていることを指摘した。ここには生者と死者との対話による往復運動が存在した。第 2 章で示したように「死者との連鎖としての生」はボトムの人々の思想となっていたといってよいであろう。

5.5　痛みの分かち合い

すでに述べたように，エヴァの 3 人の幼い子どもを 18 ヶ月もの長期にわたって世話した隣人の存在，老人の介護を近隣の人々が代わり合って行うことなど，黒人近隣社会ボトムには，互いに貧しく，何時災厄が襲うかも知れない境涯を生きのびていくための知恵があり，「大人の苦痛」を互いに分かち合い，歌や踊りによって癒し合う文化があった。

6　おわりに

以上のように，『スーラ』に描かれたボトムという黒人近隣社会には，アメリカの黒人がたどった苦難の歴史の中で培われてきたアメリカの白人文化とは異質のものの考え方，生き方が示されていた。同時にそうした黒人のものの考え方は，20 世紀初頭から中庸に至る産業の発展をはじめとする急速な変化の中で次第に失われようとしていることも同時に示されていた。21 世紀という時代にここに示された黒人の思考方法は，異なる文化的背景を持つ人々が地球上に共に生き続けるための知恵を我々に与えてくれるのではなかろうか。

注

(1)　本稿ではテクストとして Toni Morrison: Sula, New York, Alfred A. Knopf, 1993. を使用したが，

この作品の初版は1973年に出版されている。テクストからの引用の後に括弧でくくって本文の頁数を表示した。なお本文の引用の日本語訳は筆者によるが，大社淑子訳『スーラ』，早川書房，1995. を参考にした。

(2) Solomon O. Iyasere & Marla W. Iyasere: *Understanding Toni Morrison's Beloved and Sula*, New York, Whitston Publishin Company, 2000, Introduction 参照。この小説に関する多様な研究は，以下を挙げることによっても裏付けられるであろう。小説の物語の技法について論じたものにはMissy *Dehn Kubitschek* : *Toni Morrison-A Critical Companion*, Westport, Greenwood Press, 1998. pp.48-51 がある。『スーラ』を黒人女性の叙事詩と解する研究 Karen F. Stein." Toni Morrison's *Sula*:A Black Woman's Epic ", Solomon O. Iyaserer& Marla W. Iyasere(eds.): *Understanding Toni Morison's Beloved and Sula*, New York, Whitston Publishing Company, 2000, pp.49~60. 『スーラ』は 1965 年以前の過去を弔うため喪の物語であるとする Gurleen Grewal: *Circles of Sorrow, Lines of Struggle*, Baton Rouge, Louisiana University Press, 1998, pp.42-50.『スーラ』を黒人の苦難の記憶と心の傷を癒すモリスン文学に共通するテーマによって分析する Matus, Jill: *Toni Morrison*, Manchester, UK, Manchester UP, 1998, 『スーラ』においてアフリカ系アメリカ人の母娘の関係を論じる研究は以下である。Victoria Burrows: *Whiteness and Trauma- The Mother-Daughter Knot in the Fiction of Jean Rhys, Jamaica Kincaid and Toni Morrison*, Great Britain, Palgrave Macmillan, 2004., Andrea O' Reilly: *Toni Morrison and Motherhood- a Politics of the Heart*, Albany, State University of New York Press, 2004. 『スーラ』のスーラに自我のあり方，自己実現の行方を問う論文に以下のものがある。Doreatha Drummond Mbalia: (Chapter 3, *Sula*-The Struggle for Individual Fulfillment, pp.39~49.), Selinsgrove, Susquehanna University Press, 1991., Deborah E. McDowell."The Self and the Other:Reading Toni Morrison's Sula and the Black Female Text.", Nellie Y. McKay. *Critical Essays on Toni Morrison*, Boston, G.K. Hall & Co., 1988.pp77-89., Barbara Hill Rigney: "Hagar's Mirror: Self and Identity", *The Voices of Toni Morrison*, Columbus, Ohio State UP, 1991, Chapter 2, pp35-60., Diane Gillspie and Missy Dehn Kubitschek. " Who Cares? Women-Centered Psychology in *Sula*" , David Middleton: *Toni Morrison's Fiction: Contemporary Criticism*, New York, Garland publishing, Inc., 2000, pp. 61-91. 『スーラ』にフォークロアの要素があることを論証する論文風呂本淳子『アメリカ黒人文学とフォークロア』第2部第5章 pp.213-230. この小説における善と悪の問題とその関係を論じる研究は以下である。Terry Otten: "Horrific Love in Toni Morrison's Fiction" pp.651-667, *Modern Fiction Studies*, Vol.39, N.3&4, 1993. Yung-Hsing Wu "Doing thing with Ethics: *Beloved*, *Sula*, and the Reading of Judgment" , *Modern Fiction Studies*, Vol. 49, No.4, 2003. この小説におけるコミュニティの問題を論じた研究には以下のものがある。Wendy Harding & Jacky Martin: *A World of Difference-An Inter-Cultural Study of Toni Morrison's Novels*, Ch.5. Modes of Belonging in Community, pp.87-110, Westport, Greenwood Press, 1994. この小説を精神分析的に論じた研究は以下である。Houston A. Baker, Jr.: " Knowing Our Place: Psychoanalysis and *Sula*, " Linden Peach(ed.): *Toni Morrison-Contemporary Critical Essays*, St. Martin's Press Inc., 1998, pp.103-109.『スーラ』における戦争と平和の問題を論じた研究は以下である。Patricia Hunt. " War and Peace: Transfigured Categories and the Politics of Sula," Harold Bloom(ed.). *Modern Critical Interpretations: Toni Morrison's Sula*, Philadelphia, Chelsea House Publishers, 1999. pp.163-182., モリスンの小説に置いてコミュニティにおける自己と場所の探求を検討する Patrick Bryce Bjork: *The Novels of Toni Morrison- The Search for Self and Place Within the Community*, New York, Peter Lang, 1992.

(3) 本稿ではテクストとして Toni Morrison: *The Bluest Eye*, New York, Alfred A. Knopf, 1993. を使用する。以下引用の際には，*The Bluest Eye* と表す。初版が出版されたのは1970年である。

(4) 「『物語る』ことの意味」『意味のミラーボールー21世紀への序奏ー』，青木書店，1996, pp.205-234. 及び「『青い眼が欲しい』ー家族とコミュニティー」『もう一つのアメリカ人像を求めてーライト，

ドライサー，ヘミングウェイ，モリスンを読む－』，英宝社，2003, pp.239-272. を参照されたい。

(5) Toni Morrison: *Beloved*, New York, Alfred A. Knopf, 1987.

(6) 「聴くこと，語ること，そして生きること－『モモ』と『ビラヴィド』の場合－」『物語のたのしみ』，ナカニシヤ出版，2001. pp.52-75. 及び「個人の自律の条件と家族・近隣社会の変容－トニ・モリスン『ビラヴィド』を例にして－」『福祉の人間学―開かれた自律をめざして－』，勁草書房，2004. pp.57-86. を参照されたい。

(7) このことは以下のように表現されている。・・・the earth itself might have been unyielding. The Bluest Eye, p.6.

(8) このことは，モリスン自身が 1976 年にロバート・ステプトとのインタビューの際に質問に答えて「第一作よりも第二作において一層，場所への意識を強く感じた。その場所への意識は国家や州によってではなく，コミュニティやタウンの詳細，感覚や気分によってである」と述べていることからも理解できる。

('Intimate things in place: A conversation with Toni Morrison' by Robert Stepto, Danille Taylor-Guthrie(ed.): *Conversations with Toni Morrison*, Jackson, University Press of Mississippi, 1994, p.10.)

(9) 『ランダムハウス英和大辞典』によれば，ネイバーフッド（近隣社会）はある特性を備えた，またはある人々の住む土地，場所，地域あるいは都市のひとまとまりの区域を指すとされている。一方同じ辞書のコミュニティは，しばしば文化的・歴史的遺産を共有する地域共同体，地域社会，生活共同体あるいは市町村などの自治体を意味し，一つの場所・地域・国に住み，共通の意識に支えられた集団を意味する語とされている。少なくとも 1965 年に法的に市民権を保証されるまでは，黒人はひとまとまりの自治組織を形成することはきわめて困難であった。ここからもモリスンは黒人の居住地域をコミュニティと呼ぶことにきわめて慎重であったことが解るであろう。

(10) この点については前掲書中の論文 Patricia Hunt: " War and Peace: Transfigured Categories and the Politics of Sula," pp.163-182. 参照のこと。

(11) 『スーラ』pp.170-174. ネルは，エヴァに再会し，エヴァが，孫娘のスーラの葬式に参列しなかったのは，彼女のことが不憫であったためではなく，スーラに悪意を抱いていたためであったと知り，結局エヴァもボトムの人々のスーラに呈して抱いた悪意と変わりがなかったこと，したがってスーラは誰からも省みられることもなく孤立無援であったことに気づく。スーラの死を聞いて駆けつけた者はネル一人であり，葬儀屋を呼んだのも葬式に参列したのも彼女一人であった。しかもスーラの死体は白人の手で洗われ，死に装束を付けられ，埋葬された。だが，そのスーラを死の床に見舞ったネルは，なぜジュードを自分から奪ったのかと詰問しただけであった。こうしたことを一つ一つ死者との対話のうちに思い起こし，それらの意味づけをしたネルは，このときになって初めてスーラこそが真の友人であったことに気づき，号泣するのであった。

(12) 『スーラ』pp.91. 参照。

(13) このようにボトムが，悪を追放したり根絶せず，むしろ対立するもの，逸脱を含み込むのは，白人や中産階級的な文化とは異質であるとする指摘は，いくつかの研究に見られる。
その一例として，Herbert William Rice: *Toni Morrison and American Tradition*, New York, Peter Lang, 1996. の第三章 *Sula*：Of Time and Communities, p.37. 参照のこと。

(14) この間の記述は『スーラ』1919 章を参照のこと。

(15) Dangerously free. Free to feel whatever he felt?fear, guilt, shame, love, grief, pity. *The Bluest Eye*, p.159. を参照のこと。

(16) 黒人たちの以下に述べるようなものの見方や考え方を黒人の祖国であるアフリカの文化に根ざすものであるとする研究もある。黒人のものの見方や考え方にはアフリカの伝統が見られることは考えられることである。またアメリカの地で長く生きた黒人が，アメリカ文化との接触の中でその伝統をどのように変容させてきたかは興味深い問題であり，今後の課題である。